

# ミュージックセラピーの治療効果について (1)

—— 広汎性発達障害(自閉傾向) 児の事例を通して ——

山下 恵子

## The Effect of Music Therapy(1) —— A Case Study of Pervasive Developmental Disorders in a Child ——

Keiko YAMASHITA

### はじめに

近年、ミュージックセラピーに対する関心は益々高まってきている。その治療方法、内容については模索状態が続いていたが、現在ではかなり状態が良くなってきている。例えば、松井紀和(1989)が述べているように、ミュージックセラピーの目的が、はっきりしてきて、それが一般化してきたように思う。「音楽療法とは、音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを、心身の障害の回復、機能改善に向けて、意図的、計画的に活用して行われる治療技法である」(松井, 1989:1819)

こういった目的にしたがえば、ミュージックセラピーの実際の研究の形態はいくつか様々であるけれども、2つに分けることができる。1. 音を聴かせることによって、音楽自身の働きを直接利用しようとする方法。2. 音楽活動の持つ発達促進的、機能回復的な働きを活動療法的に使用する方法。本研究では、後者の形態によるミュージックセラピーを行い事例研究を行う。そのことによって、ミュージックセラピーが治療手段としていかなる治療的な効用を持つかというミュージックセラピーの効果に関するメカニズムの解明へと進めたい。したがって、現在では、ミュージックセラピーの研究形態の半数をしめる、鑑賞的に音楽を聴かせることによって、音楽の与えた影響を考察する研究とは根本的に異なるものである。

### I. 目 的

本稿では、音楽活動の持つ発達促進的、機能回復的な働きを活動療法的に使用する方法で事例研究を行い、3つの点を明らかにすることを研究目的とする。

1. コミュニケーションができない状態から、ある程度コミュニケーションができるようになるまでの過程において、音や音楽や音楽活動が治療手段としてどのように役立つかということの治療者の関わり方を中心に検討する。ここでいうコミュニケーションには、言葉を使った意思の伝達方法に加え、視線が合う、身体的な動作で応答を行う、音と音を使ってやりとりを行うなどの言葉を使

わない伝達方法も含んでいる。

2. 治療経過において言葉をどのように音楽的に処理しているのかという、言葉の音楽的処理方法の変遷を検討する。

3. 治療初期に使われる音楽的な技法の有効性を検討する。

## II. 方 法

### 1. 研究方法

本研究は次の(1)から(4)の手順で行った。

(1) 初回、子どもと親に対する面接を行う。ここでは、子どもの様子を自然観察し、これまでの生育歴および音楽的な環境および子どもが興味をもつ遊びについて母親より聴取を行う。

(2) 治療のための長期治療目標を「遊びを通してのコミュニケーション機能の発達促進」とする。

(3) セラピストが治療プログラムを作成し、短期治療目標、内容の見直しを図りながらセラピーを進める。

(4) 不定期ではあるがセラピー場面のビデオ撮影を行い、記録をもとに分析を行う。

### 2. 対象児および問題の概要

(1) 氏名 : Aちゃん

(2) 来所年齢 : 2歳9ヵ月

(研究年齢は、2歳9ヵ月～3歳11ヵ月と6歳5ヵ月～7歳4ヵ月)

(3) 性別 : 女

(4) 主訴 : 言葉の遅れ

(5) 診断名 : 広汎性発達障害

[広汎性発達障害とはDSMIII R (米国精神障害診断分類基準)による診断名で自閉性障害を指す。]

(6) 家族構成 : 父, 母, 妹

(7) 生育歴

① 出生前～妊娠9週目に切迫流産の疑いで1週間入院。

② 出生時および乳児期～正常分娩により、出生時および乳児期に特に問題は見られない。

③ 幼児期～人見知りはない。1才9ヵ月ころより表情が消え、発語も見られない。嫌いな音楽には耳をふさぐという行動が見られる。2才1ヵ月の時に妹が誕生し、その時より、一日中テレビを見るようになり、耳をふさぐ行動がエスカレートする。家族の言語的な指示に従うことはほとんどない。2歳9ヵ月になりT医科大学病院受診。T医科大学病院の紹介により県立の某療育機関来所。

(8) 来所時の状態像～初回面接の際、同室にいることはできず、部屋を飛び出して走り回る。視線は全く合わず、母親の指示にも従わない。おもちゃに少し触れては落ち着きなく次のおもちゃに触れる。体に触れると、「いや」という表情をして手で払いのける。

(9) 幼児期の状態

3歳4ヵ月より保育所入所。6歳4ヵ月より普通小学校普通学級入学。

## 3. 治療時の年齢・治療の場所・期間・回数・時間・治療空間の広さ

表II-1 治療時の年齢・治療の場所・期間・回数・時間・治療空間の広さ

内 容	前 半	後 半
治療時の年齢	2歳9カ月～ 3歳11カ月	6歳5カ月～ 7歳4カ月
治療の場所	某療育機関研究室	
期 間	平成元年9月～平成2年10月	平成5年5月～平成6年4月
回 数	43回	30回
時 間	1回30分	
治療空間の広さ	約20畳	

## 4. 治療方法

## (1) 治療方法

治療の方法は、次の通りである。治療場面の構造は、枠の治療構造（山下，1989a）を用い、始まりに使う〈譜例II-1 こんにちはこのうた〉と終わりに使う〈おててつないで〉の歌を定型とし、活動の中は子どもが自由に活動を選択できる環境を設定する。

## (2) 治療技法

治療技法は松井（1990）の“BED MUSIC”の技法を用いる。BはB. G. M.。EはEcho-T.（T.はTechniqueの略語である）。DはDialogue。MはModeling。UはUnaccomplished T.。SはStimulative T.。IはIso-T.。CはCall T.の略号である。この略号について少し詳しく説明する。

B. G. M.：Backgroundmusicの略号で、子どもが音楽活動以外の活動に専念している時に、その活動を促進したり、動作を円滑にしたりするために用いる技法である。

Echo-T.：子どもの表現したものを、音楽で山びこのように返していく反響技法。

Dialogue：対話と呼ばれるもので、音によるやりとりを行うものである。声と声、楽器と楽器、声と楽器によるものなどがある。

Modeling：治療者が子どもにモデルとしてやって見せる技法である。

Stimulative T.：刺激技法で、子どもの運動を誘発するような賦活的な音を使用したり、子どもの現在の情緒やリズム、テンポから離れた音を提供して、子どもの中に反発、攻撃等を引き起こし

て、それを音楽活動に誘導していくものである。

Iso-T.：同質技法で、Altschuler, I. M. (1954) が提出した、Iso-principle を拡大して子どもの情緒、欲求、関心、動き、テンポ等に同質の音を提供することをいう。

Call T.：呼びかけ技法で、＜譜例II—1 こんにちはのうた＞や＜譜例III—1 呼びかけ歌＞のように、開始時や終了時、決められた活動にテーマ音楽として音楽で反復して呼びかけていくもの。

これまで述べた松井の技法に、ここでは Improvisation という技法を加える。これは、即興と呼ばれるもので、＜譜例III—3 質問うた＞に示したように、既成の曲にこだわらず子どもの反応に合わせて、旋律やリズムなどを自由に演奏する技法である。

### (3) 実際の活動

①前半～楽器を自由に鳴らし合う楽器遊び。すべり台を滑るAちゃんの動きに合わせてB. G. M. をつける室内すべり台。簡易プールに大豆を入れて遊ぶ大豆プール遊び。大型積み木、手あそび歌等のおそび歌、黒板に絵を描きながらあそぶ絵かき歌を行う。

②後半～音楽の友社から出ているくうたとピアノの絵本＞という教材を使ったピアノのレッスン、指導者と交互に行う楽器と楽器のやりとり、絵を描きながら質問に答えていく絵かき歌インプロビゼーション、牛乳パックの教具による数え歌を行う。

## III. 治療経過

Aちゃんの治療経過を次の4つの時期に分け、特徴を述べる。

第1期：セッション1～10 (2歳9ヵ月～2歳11ヵ月)

第2期：セッション11～33 (3歳～3歳8ヵ月)

第3期：セッション34～44 (3歳8ヵ月～3歳11ヵ月)

セッション45～48 (6歳5ヵ月～6歳6ヵ月)

第4期：セッション49～73 (6歳6ヵ月～7歳4ヵ月)

### 1. 第1期：セッション1～10

#### (1) 治療目標

コミュニケーションができる状況を設定するために、安心した遊びの空間を作る。

自由に活動が選択できる空間を作る。

#### (2) セラピストとのコミュニケーションの方向性

セラピストから子どもに送られているのみで、相互のコミュニケーションはほとんど見られない。

#### (3) セラピストとの身体的距離

セッション5までは近寄ることを拒否。セッション6からは拒否はしないが、遠巻きに見ている。

#### (4) 活動内容

室内すべり台、ブランコ、大豆プール、大型ボール、大型積み木。

#### (5) 具体的操作

楽器や大豆などに触れることで触覚的な刺激を行い、そのことで感覚を入力するための援助を行う。また感覚運動にB. G. M. を付けた遊びを行うことで遊びを楽しくし、感覚を統合するための援助を目指す。日常的な生活と密着した子ども曲を使用することによって子どもの持つ音楽的な

言葉と一致させる工夫を行う。言葉の意味処理を必要としない遊びの場を設定する。非指示的なアプローチを主として行う。

(6) 音楽的な技法

B. G. M., Stimulative T., Iso-T., Call T., Improvisation.

(7) 結果

セッション1, 2は, セラピストが遊びに関心を持たせようとして, Aちゃんに呼びかけるが視線は合わない。自発語はなく, 一人であちこちと動き回る。セラピストは微笑みかけてAちゃんに声をかけるが無表情。身体的に近づいてみると身体的な接触を嫌う。遊具への関心は緩慢。セッション2からセラピストはAちゃんに遊びを強要したり, 遊びに誘うことは一切行わない。遊びを行うための安心した場面作りを目ざす。無理に身体的に近づくことをせず5メートルほどの距離において音で呼びかけることを行う。セッション6になると, セラピストの呼びかけに対して視線を送り, 一瞬ニコリとする。遊びにはやや関心が生まれる。セッション6では, Aちゃんという呼びかけ歌<譜例III-1呼びかけ歌>に対して視線を送るようになる。音や言葉によって応答を行うことはできない。

## 2. 第2期:セッション11~33

(1) 治療目標

音, 音楽, 遊具, 絵を媒介にしてコミュニケーションを促進する。

(2) セラピストとのコミュニケーションの方向性

相互のコミュニケーションが見られ, 友好的。

(3) セラピストとの身体的距離

甘えの態度やクレーン現象が見られ, 身体的な接触も可能となる。

(4) 活動内容

太鼓, タンブリン, 鈴, キーボード等の楽器を使ったやりとり。ボールのやりとり。絵かき歌。室内すべり台, ブランコ, 大豆プール, 大型積み木。

(5) 具体的操作

音や音楽, 遊具, 絵を使った活動がやりとりとして機能するように, コミュニケーション遊びへと展開する工夫を行う。

(6) 音楽的な技法

Dialogue, Echo-T., Modeling, Iso-T.

(7) 結果

セッション12では, すべり台をすべりながら「アー」と言う発声が見られる。セッション15になると, 視線は良く合うようになり, セラピストの手をとって自分の希望するブランコ, すべり台, 大豆プールの場所へと連れていこうとする。この頃から「いや, いっぱい, こっち」などの自分の意思を伝えようとする単語がでてくる。同質の音の提示には, 視線が合うようになり, 太鼓の上にあげたマレットを降り下ろす真似をするなどのかけひきのような場面が見られる。この頃家庭でも, 母親に簡単な要求を示すようになる。セッション19において, セラピストが黒板にテレビ流行の絵かき歌を書くと, Aちゃんは突然, セラピストが機械的と感じる「アンパンマン, ピッコロー, ポ

ロリー」という声を出して絵をかく。ほめると嬉しそうにニコリとして4, 5回同じ絵を描く。〈絵Ⅲ-1 絵かき歌〉は、歌に合わせて書いたAちゃんの絵である。この頃より、1つのあそびに集中するようになり、模型の野菜を使ったやりとり遊びや遊び歌を用いた野菜の分類、ピアノとピアノやタンブリンとタンブリンのやりとり、ボールのやりとりなどを行う。セッション28になると言語的な指示がかなり可能になり、「オオチマルとちて」（大きいバルーンをとってほしいと言う意味）という2語文がでる。

楽器を使った遊びでは、タン、タン、タン、ウン《♪♪♪♪》というリズムに対してターアータンウン《♪♪♪》というリズムを返す。遊具を使った遊び、絵書き歌の活動においてもやりとり遊びを好んで行う。

呼びかけ歌に対しては、〈譜例Ⅲ-2 呼びかけ歌の応答〉に示したように、音で答えることができるようになる。

### 3. 第3期：セッション34～48

#### (1) 治療目標

音楽や絵を媒介にして言葉を使ったコミュニケーションを促す。

#### (2) セラピストとのコミュニケーションの方向性

円滑に相互のコミュニケーションが行われる。

#### (3) セラピストとの身体的距離

Aちゃんの方からセラピストの体に触れてくるなど、積極的に身体的な接触を行う。

#### (4) 活動内容

〈うたとピアノの絵本1〉を使ったピアノレッスン。音楽を使った呼びかけ歌に対して絵をかきながら即興的に答える絵かき歌インプロビゼーション。

#### (5) 具体的操作

話し言葉に近い旋律や基本とするリズムを何度も繰り返して使い、簡単に応答できる音楽を作ることによって即興的な展開を計る。

#### (6) 音楽的な技法

Dialogue, Improvisation, Echo-T., Modeling, Stimulative T., Iso-T.

#### (7) 結果

セッション43からセッション44の間に2年6ヵ月の空白期間があるが、Aちゃんはセッション44ではセラピストに対して「この人知っている」という表情をして自分からピアノに座る。セッション44以降毎回、ピアノに座り、ピアノを両手で等拍のリズム叩きしながら、子どもの歌を次から次へと歌っていく。Aちゃんに合わせてピアノの高音部で旋律に合う和声を弾きながら歌うと、チラッチラッと視線を送り嬉しそうにする。〈うたとピアノの絵本1〉の教材を指導者が歌いながら弾くと、すぐに旋律のない同一音程で言葉とリズムを真似る。セッション48からは自らドレミを楽譜に書きドレミに合わせて「ドレミ」と階名唱しながら教材を弾くようになる。〈うたとピアノの絵本1. 2〉をすべて暗譜してこの教材は終る。

もう一つの活動である、絵かき歌インプロビゼーションでは、歌とピアノによって、〈譜例Ⅲ-3 質問うた〉を行うと、セッション44から、1日の様子を絵に書きながら答えるようになる。〈絵

Ⅲ-2 時間割, 絵Ⅲ-3 カレーライス参照>。絵Ⅲ-3のカレーライスは, <今日の給食何ですか>という質問うたに対して, Aちゃんが「ニンジン, タマネギ, ジャガイモ, ぶた肉」の順で答えていき, 最後にAちゃんが「ふんわりカレーの出来上がり」と歌ったものである。<譜例Ⅲ-4 カレーライスの歌参照>。

#### 4. 第4期:セッション49~73

##### (1) 治療目標

音楽をAちゃんの楽しみの要素として位置づける。言葉によるコミュニケーションを促進する。認知機能の向上を計る。

##### (2) セラピストとのコミュニケーションの方向性

簡単な言葉を使ったコミュニケーションが相互で行われる。

##### (3) セラピストとの身体的距離

セラピストに直接身体的な接触を行わない。べたべたとくっついてくることは行わず, 先生と生徒の関係としてあまり甘えてはいけないのではないかという態度をとる。

##### (4) 活動内容

楽譜を使い, ピアノやパーカッションの楽器による音楽曲の演奏を行う。絵かき歌インプロビゼーション, 数え歌を行う。

##### (5) 具体的操作

音楽をAちゃんの生活の中に楽しみの要素として位置づけるために演奏の楽しさを重視する。シンボル機能として楽譜を使用することで, 認知機能の向上を図る。学習面で困っていることの援助を音楽を使って行う。数え歌において, 可能な限り, 話し言葉に近い旋律の作成を行う。

##### (6) 音楽的な技法

Dialogue, Improvisation, Modeling, Iso-T。

##### (7) 結果

セッション44以降行っているピアノ演奏では, <うたとピアノの絵本3>を使った演奏や子どもの歌に合わせたパーカッション演奏を行う<図Ⅲ-1 Aちゃんのパーカッション配置参照>。Aちゃんは, 演奏しながら, 真剣な表情をして, 生き生きしている。演奏が終わるとセラピストの顔を見て, 満足した表情をする。

この時期, 学校で数の計算ができなくて困っているということを母親から聞き, セッション60より数え歌<譜例Ⅲ-5 数え歌参照>を始める。この数え歌では, 可能な限り話言葉に近い旋律の作成を行う。牛乳パックで家の形を作り, 絵かき歌インプロビゼーションによって牛乳パックに絵を書いた後, セラピストの質問に対して, Aちゃんが答える。セッション65では10までの足し算, 引き算ができ, セッション70では, 30までの足し算, 引き算ができる。かけ算はできない。

セッション70の頃には, 自分の気持ちを学校の先生にも伝えることができるようになる。セッション73終了後, 本人が母親に「もう先生おしまい」と言い, 6年間に渡るセラピーをを終了する。その後時々Aちゃんに会うが, 「こんにちは」と挨拶ができ, 母親がだれと聞くと「○○ブー」(セラピストの名前)と冗談が言えるようになっていく。学校生活にも適応している。

## IV. 考 察

### 1. コミュニケーションの発達について

#### (1) 第1期：心理的な関係確立期

セッション1～5までは、セラピストとのコミュニケーションの方向性もセラピストからAちゃんに送られているのみで相互のコミュニケーションはほとんど見られていない時期であった。直接コミュニケーションを行うことを拒否していたAちゃんに対して、セラピストは音や遊びを使った提示を行っていた。その結果セッション6になるとコミュニケーションの芽生えが見られるようになっていた。このことから、セッション1～5は、人からの交流を不快と思っていたAちゃんが、セラピストの刺激を不快ではない刺激として受け取ることができるようになっていく過程であったと考えられた。表面的には、不快の態度であったがセラピストに関心を持ち始めた段階であったと考えられる。音による刺激は人による刺激を包み込む、フィルター的な役割を果たしたのではないかと思われた。

セッション6では、セラピストの呼びかけに対して視線を送るようになり、身体的には距離を保ちながらも遠巻きに見るようになっていく。セラピストへの関心が起こり、安心感が形成されつつあった時期と考えられた。

第1期行われた活動である、室内すべり台、ブランコ、大豆プール、大型ボール、大型積み木は、Ayres, A. J. (1972) の言う視覚、聴覚、固有感覚、前庭感覚を刺激する感覚統合の理論に一致する遊びであった。宇佐川浩 (1994) は、“音楽療法の活動による発達診断”の中で、発達水準を8つのステージに分け、最も初期を感覚入力、次を感覚運動と分けている。このように感覚を刺激する遊びは、Piaget J. (1978) の発達理論にも見られるように、発達初期に見られる遊びと一致するものであった。ここでは、この感覚運動遊びが、治療初期のコミュニケーションのきっかけを作ったと考えられた。更に、このような感覚運動遊びにB. G. M. をつけることによって、遊びの雰囲気作りに役立ったと考えられる。曲の選定において、日常生活と密着した曲の設定や、子どもの情緒、テンポ、身体リズム、行動形態、認知機能と一致させた同質の音楽を用いたことによって、ラポール形成が行えていったのではないかと考えられた。更に、受容的な態度や音のフィルターを通しての提示によってノンバーバルなコミュニケーションが引き出されていったものと考えられた。ノンバーバルなコミュニケーションが行われ始めた環境を山下 (1989a) は、ウィニコット, D. W. (1979) の言う holding environment (抱擁的環境) と呼び、治療初期にこのような環境を設定することが相互コミュニケーションを高めていくことを先行研究において確認している。

この時期の前半は、好ましい関係を確立するために、受容的なアプローチを行い、音を介しての提示を行うことによってノンバーバルなコミュニケーションが引き出されていった。また後半は、B. G. M. をつけた感覚運動遊びや同質の音楽を与えることによって、遊びの場面やセラピストに対する安心感が形成され、このことによってコミュニケーションの糸口をつくる holding environment の治療空間ができ、セラピストとの心理的な関係ができあがったものと考えられた。

#### (2) 第2期：音・音楽・遊びを使ったノンバーバルコミュニケーション期

第2期になると、相互のコミュニケーションが見られセラピストとAちゃんとの関係は友好的な



ものになっていた。セラピストとの身体的距離は近くなり始め、セラピストに対する甘えの態度やクレーン現象が見られるようになっていた。「アー」という発声や、「いや、いっぱい、こっち」などの自分の意思を伝える言葉ができるようになり、やりとりの機能を持つ遊びが多く行われていたことも特徴としてあげられる。

活動の内容は、第1期の感覚運動を主体とした遊びに加え、楽器や絵、ボールなどの遊具を用いたコミュニケーションの機能を持つ遊びや手指の巧緻性を必要とする遊びが主体となっていた。ブルーナー J. S. (1983 : vi) は、言語獲得というものが、子どもの最初の語彙—文法的なことばを発する前に始まると述べている。子どもが自分自身のコミュニケーションの意図を明確に示し、他人の意図を理解できるようになるために、コミュニケーションを助けるための媒体を「フォーマット」としている。つまり、大人と子どもが共応して言語を伝え合うことができるようにするためのパターン化された場面がフォーマットであり、これがコミュニケーションを助けるものと述べている。即ち、ここでは、音、音楽、絵、遊具を用いた活動は、ブルーナーのいうコミュニケーションを助けるためのフォーマットとして存在していたと考えられ、特にタンタンウン《♪♪♪♪》に対してターアタンウン《♪♪♪》を返すような直接音を使ったやりとりは、音によるコミュニケーションフォーマットとして存在しやすいものと考えられた。

この時期は、音、音楽、遊びを使った活動を直接コミュニケーションのためのフォーマットとして用いることによってノンバーバルコミュニケーションが進んでいったと考えられた。これらの活動は、言葉に変わるコミュニケーションの道具として活用しやすいものであると考えられた。

### (3) 第3期：音・音楽・言葉を使ったバーバルコミュニケーション期

第3期になると、円滑な相互コミュニケーションが行われ、身体的な距離もコミュニケーションの相手として近くなっていた。前の時期とは異なり、言葉を使い、多少言葉の意味処理を必要とするコミュニケーションが行われ始めたことが特徴となっていた。言葉のみのコミュニケーションをあまり得意としないAちゃんに対して、音楽を言葉と言葉の間に触媒として使用したバーバルなコミュニケーション期と考えられた。

実際の活動では、既成のピアノ曲を弾くことで、楽譜を見て音を弾くというシンボル機能を持つ認知活動を行っていたと考えられた。更に、絵かき歌インプロビゼーション<譜例Ⅲ-3 質問うた>の活動では、次のような工夫を行うことでバーバルなコミュニケーションへと進めることを行っていた。a. 話し言葉に近い旋律を作る。b. 基本とするリズムを繰り返して使う。c. 簡単に応答できる音楽を作る。d. Aちゃんの反応に対して即興的な展開を計る。

この時期は、音楽や絵を言葉と言葉の間に触媒として用いることによって、バーバルなコミュニケーションが進んでいったものと考えられた。

### (4) 第4期：音楽を使った自己表現および学習期

第4期になると、ピアノや楽器による活動はレッスンとして成立するようになっていた。音楽活動は、これまでのコミュニケーションを促進するという目標や認知面の向上を計るという目標とは異なり、音楽で自分を表現するための活動へと変化していた。生き生きと演奏に取り組み、満足した表情は音楽を楽しむことができるようになったAちゃんの姿であったと思われた。また、数え歌

の活動では、牛乳パックの教具や音楽を用いることで10回のセッションで30までの足し算引き算が可能になっていった。これは、音楽を使って数の処理をしやすいパターンを提示することによって、遊びの中で数を処理できるようになっていったものと考えられた。

この時期は、ピアノや楽器の活動を通して、音楽を楽しみ、自己を表現できるようになっていった時期であった。また、数え歌の活動において、30までの計算は容易に可能になっていき、ここでも音楽は、〈譜例Ⅲ－5 数え歌〉に示したように数の計算を進めるためのフォーマット、そして触媒として存在していたものと考えられた。

以上、4つの時期について考察を行った。松井（1980）は、自閉症の対象関係発達モデルの中で治療経過を、①初期の強い自閉性の段階、②治療者への関心が起こり、安心感が形成された段階、③治療関係が形成され、言語的、非言語的交流が行われる段階と述べている。松井のいう対象関係発達モデルとAちゃんのコミュニケーションの発達は非常に類似性の多いものであった。

## 2. 言葉の音楽的な処理方法の発達過程について

セッション1～5においては、呼びかけ歌に対する反応がなく、言葉を音楽的に処理することは全くできない状態であった。セッション6になると呼びかけ歌に対して、視線を送るようになっていく。つまり同じ形式の音楽的なパターンに身体動作として反応ができるようになったと考えられた。セッション15になると呼びかけ歌に対して、ターアータンウン《♪♪♪》〈譜例Ⅲ－2 呼びかけ歌の応答参照〉と応答できるようになっている。セッション44では、簡単な楽譜を用い、パターンに従った演奏が可能になっていた。セッション49になると、〈譜例Ⅲ－4 カレーライス〉の歌に示したように、これまでに学習された音楽を用いた処理パターンに従って、コンテキストに合う音楽処理を行うことができるようになっていた。健常幼児に多々見られる自発的かつ即興的に音楽を処理していく方法（山下，1993）は、残念ながらこのカレーライスの歌のみであった。

このように、Aちゃん言葉の音楽的な処理方法において、ノンバーバルな音楽的処理パターンからバーバルな音楽的処理パターンへとという発達過程を見いだすことができる。この発達過程は、ことばや動作、思考等が一体となって音楽的な処理を行う日本の健常幼児の音楽的な処理方法とは異なるAちゃん独自のものであると考えられた。日本の健常幼児の音楽的な処理方法については、藤田美美子（Fujita 1988）と尾見敦子（Omi 1994）がすでに述べている。

## 3. 音楽の治療初期の技法の有効性について

これまで述べてきたように、第1期から第4期のそれぞれの時期において音楽的な技法は、コミュニケーション機能に影響を与えてきたと考えられる。特に、コミュニケーションを行うことができない状態から、ノンバーバルなコミュニケーションが行われるまでに用いた音楽的な技法に焦点をあて考察を行う。

Iso-T. は、第1期から第4期すべての時期に用いられた技法であった。特に、第1期の心理的な関係を作る上で、この同質の技法は大変重要な技法であった。Altschuler, I. M. (1954)は、iso-principle という技法を最初に提唱した。この iso-principle を用いる治療仮説は次のようなものである。患者の情緒の発散を一つの目標とした場合には、その患者の情緒と同質の音楽を用いることによって、その情緒が増幅され、発散されることになるというものである。また、松井（1980）

は、この同質の原理を人格のあらゆる側面に拡大して、適応水準という概念を提唱している。適応水準とは、同質の情緒、同質のテンポ、リズム、同質の行動形態、同質の認知機能等々のiso-principleの技法を含んだ包括的な概念である。更に、中島恵子(1991)は、ドラム同質を提唱し、「質」を同じにするために呼吸の大切さを強調している。Nordoff, P. と Robbins, C. (1977)は、ピアノとドラムを即興的に演奏することによる同質の実践場面の例をあげ、その同質の意義について強調している。

Aちゃんの事例を通して、このIso-T.の技法は、セッション1～10の治療初期にセラピストへの興味が生まれるまでに効果的な技法であったといえた。Iso-T.とは、子どもとコミュニケーションを行うための基礎作りを行うための技法であり、子どもの身体リズム、テンポ、呼吸、情緒、認知機能などの身体行動や知的行動に合致する音楽を提供することを旨とするものであった。セラピストと子どもが、身体的、知的、音楽的な語意と相互に一致する瞬間を模索していく中で、相互に一致したと感じる瞬間が同質の瞬間ではないかと考えられた。このIso-T.がうまく行われたか、否かということは、Aちゃんの事例でも明らかなように、コミュニケーションができない状態から、次のコミュニケーションが行われるような行動が見られるようになるかどうかということで判断がつくものと考えられた。

今後、音楽の技法の有効性については更に詳細な検討を進めたい。

#### 4. 考察のまとめ

(1) 治療過程において、それぞれの時期の特徴は次のようなものであった。

心理的な関係確立期では、コミュニケーションができない状態から間接的ではあるが身体動作を使ったノンバーバルなコミュニケーションが行われるまでの間において、背景音楽を使用した感覚運動遊びとIso-T.による音の提示を行うことによって、相互のコミュニケーションが生まれるためのholding environment(抱擁的環境)が作られた。

音・音楽・遊びを使ったノンバーバルコミュニケーション期では、音や音楽、遊びを用いた活動をコミュニケーションのためのフォーマットとして用いた。これらの活動は、言葉に変わるコミュニケーションとして存在し、ノンバーバルなコミュニケーションが相互で行われた。

音・音楽・言葉を使ったバーバルコミュニケーション期では、音楽や絵は、言葉と言葉との間に触媒として機能し、このことによってバーバルなコミュニケーションが進んでいった。

音楽を使った自己表現および学習期では、ピアノや楽器の演奏は、楽しみの要素となり、自己を表現する素材として用いられた。数え歌において、音楽は数の計算のためのフォーマット、そして触媒として存在し、概念形成のための援助を行った。

(2) 言葉の音楽的な処理方法において、ノンバーバルな音楽的処理パターンからバーバルな音楽的処理パターンへとという発達過程が見られた。ノンバーバルな働きかけが先行するという点において、健常幼児に見られるパターンとは異なるものであった。

(3) 音楽の治療初期の技法であるIso-T.は、子どもとコミュニケーションを行うための基礎作りを行う技法であった。この技法において、子どもの身体リズム、テンポ、呼吸、認知機能などの身体行動や知的行動に合致した音楽を提供することで、子どもの身体的、知的、音楽的な語彙と一致させる瞬間を模索することが必要とされた。

## V. 結 論

広汎性発達障害児に対してミュージックセラピーを行った結果、治療者との関わりの中で、コミュニケーション機能の発達が見られた。音や音楽を用いた活動の治療的な特質について確認されたことは次の4点である。

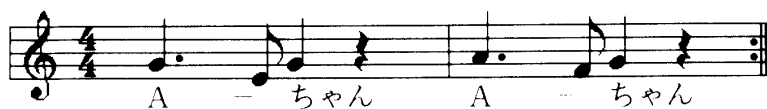
- (1)治療初期の心理的な関係は、非指示的な態度や音を介しての提示を行うことによって確立されやすい。特に Iso-T. が治療的効果に関与している。
- (2)音や音楽を用いた活動は、言葉に変わるノンバーバルコミュニケーションのためのフォーマットとして存在することができる。
- (3)音や音楽を用いた活動は、言葉と言葉の間に触媒として機能することができる。
- (4)音や音楽を用いた活動は、自己を表現するための手段として用いることができる。

### 〈図, 絵, 譜例集〉

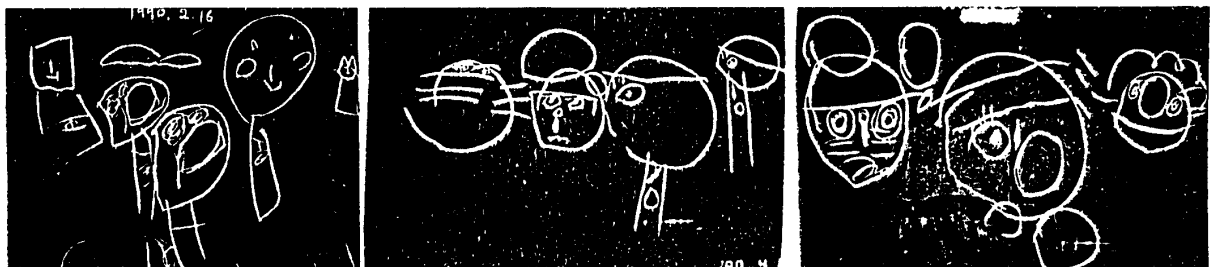
譜例II-1 こんにちはのうた



譜例III-1 呼びかけ歌

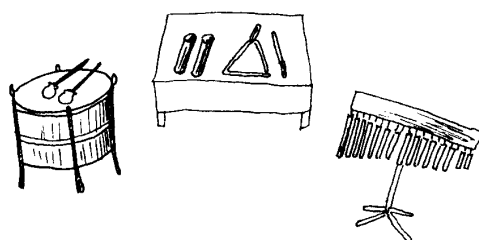


絵III-1 絵かき歌

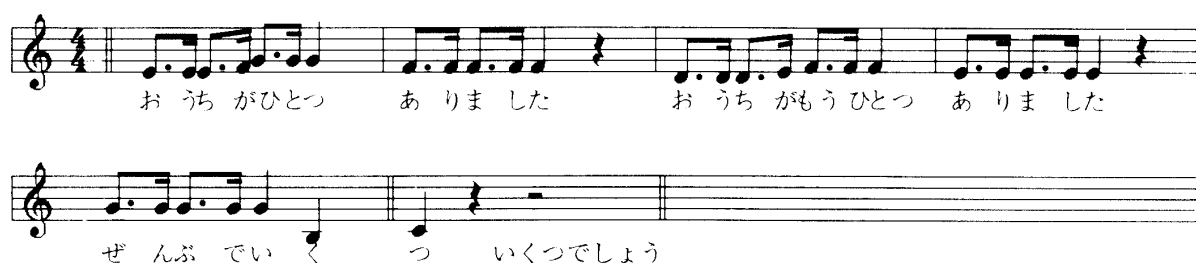




図III-1 Aちゃんのパーカッション配置



譜例III-5 数え歌



引用文献

Altschuler, I. M.

1954 "The past, present and future of musical therapy." *Music in Therapy*. (ed. by Podolsky, E.) : 24  
 (New York : Philosophical Library)

Ayres, A. Jean

1972 *Sensory integration and learning disorder*. (Los Angeles : Western Psychological Service)

エイアーズ, A. J.

1978 『感覚統合と学習障害』 宮前珠子訳 : 17-29 (東京 : 協同医書出版社)

Blacking, John

1973 *How musical is man ?* (Seattle : University of Washington Press)

ブラッキング, J.

1978 『人間の音楽性』 徳丸吉彦訳 (東京 : 岩波書店)

Bruner, J. S.

1983 *Child's talk learning to use language*. (Oxford : Oxford University Press)

ブルーナー, J. S.

1988 『乳幼児の話しことば』 寺田晃・本郷一夫訳 : 5 (東京 : 新曜社)

Fujita Fumiko

1988 *Problems of Language, Culture and the Appropriateness of Musical Expression in Japanese Children's Performance*. (東京 : Academia music)

松井 紀和

1980『音楽療法の手引き』（東京：牧野出版）

1989「レクリエーションとしての音楽，治療としての音楽」『臨床精神医学』 第18巻 第12号：1819～1824  
（東京：国際医書出版）

1990「音楽療法における音楽の使用について」『音楽療法研究年報』第19巻：1-12 （東京：日本音楽心理学音楽療法懇話会）

松井紀和先生の還暦を祝う会

1990『松井紀和先生還暦記念論文集』：327～333（山梨：日本臨床心理研究所）

中島 恵子

1991「Co-Musictherapy」『文化とセラピー』第1号：17～29 （山口：こども音楽センター）

Nordoff, P.; Robbins, P.

1977 *Creative music therapy*. (New York : John Day)

Omi Atsuko

1994 “Children’s spontaneous singing –Four song types and their musical devices–”

『川村学園女子大学研究紀要』第5巻 第2号：61～76

ピアジェ, J.

1978『知能の誕生』谷村寛・浜田寿美男訳（京都：ミネルヴァ書房）

宇佐川 浩

1994「音楽療法における発達診断」『音楽療法』第4巻：17～23 （山梨：日本臨床心理研究所）

山下（丸岩）恵子

1989a 「発達障害児の音楽療法」お茶の水女子大学大学院修士論文

1990「音と音楽を用いたコミュニケーションの成立過程について」『松井紀和先生還暦記念論文集』：327～333

1993「1歳児の音楽行動の現れ方について－集団音楽遊びの実践の中で－」

『全国大学音楽教育学会研究紀要』第4号：67～75 （東京：財団法人 松下視聴覚教育研究財団）

Winnicott, D. W.

1971 *Playing and reality*. (London : Tavistock Publications)

ウィニコット, D. W.

1979『遊ぶことと現実』橋本雅雄訳：200（東京：岩崎学術出版社）

## 付 記

本研究および論文作成にあたって，日本臨床心理研究所所長の松井紀和先生，お茶の水女子大学の徳丸吉彦教授，宮崎大学の安東末廣教授にご指導，ご助言いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

また，ご協力いただいた，宮崎県立こども療育センターの職員の方，母と子どものための音楽研究所の先生方，見山富士夫氏，そしてAちゃんとそのご家族の方に心よりお礼申し上げます。

〔1994年12月10日受理〕